

数年前のことです。当時働いていた病院で、いくら病理検査技師や細胞検査士を募集しても応募なく、何回も再募集を繰り返したことがありました。その後、精度管理を担当することになった大手の衛生検査所でも、常時技師不足で公募すれども人を集めることが困難な状況が続いているのに気付きました。いくつかの病院の検査技師さんに聞いてみると、他の多くの施設でも同様で、特に新卒者が得られ難くなっているとのことでした。そこで、昔一緒に働いたことのある技師さんでその時ある大学で非常勤講師として働いている人や教員の技師で臨床検査科の教授をやっている者がおりましたので、現状を聞いてみました。「確かに、現在の学生にいわゆる根性のない者がいるのは確かだし、検査技師の職業内容を知らずに来ている者、無目的で来ている者、途中で辞める者がいるのは事実です。また自分達の時代のように真剣に学び、実習や研究室配属で発奮して取り組む者も少ない。卒業して検査室に就職しても長続きしない者も多く、辞めて大学院へ入る者、大学院を卒業しても同じように検査の道に進まず他の道に転職する者もいる」とのことでした。なぜそういうことが起ったのかを尋ねてみました。いくつかの点を指摘してくれましたが、その中に「我々の方にも問題がある」といった発言もありました。検査技師という職種が知られていないのは我々の努力が足りないのではないか、また入学した学生に医療の中での検査の役割、検査や医療の歴史について十分に教えられていない、特に実際の現場では技術や機器が進歩しているのに、大学では十分にそれらに対応できる教育が行えていない、実際にすべての検査室や検査所という職場を見せることができないなどのハンディが大学にはあるといったことを理由に挙げてくれました。そして最後に、教授陣にこれらのことを教える時間や知識がないのが現実ですとの回答でした。

我が国の大学教育のみならず中学、高校の教育にも以前から問題点が指摘されてきました。その中に、我が国では小さい頃からいわゆる社会教育、実地教育が等閑にされているのではないかというのがありました。その最たるものが大学の医学部教育でもありました。私が学校教育を受けた時代は戦後から昭和の中・後期にかけてで、すでに50年以上も前のこととなります。教室で椅子に座り、一人の教師からの講義を全員で聞く方式が主でした。工場見学などはあったのですが、通過するだけだったようで記憶にもありません。若い頃には、実社会には興味が持てないものなのかも知れません。しかし、実社会で実際に働いている人達がやってきて経験談を話したり、みずからその現場に行ってみ学したり、その人達と話をする機会はなかったように思います。実社会に関する講義があつたとしても、社会経験のない先生が自分の専門分野でもないことを教室で学生に話すような講義だったでしょうから、要領を得ず、興味を引くようなものではなかったでしょう。アメリカのようにボランティア活動が重視されたり、イギリスのように高校卒業後1年間は医療系施設を含め様々な施設等でのボランティア活動が義務付けられ進学への評価対象となるようなことは

勿論ありませんでした。現在も似たり寄ったりのものかも知れません。ほとんどの人は少なくとも1度や2度は病気を患うでしょうから、診療所や病院には行くでしょう。従って、医師という職業はある程度まで知ることができます。しかし、その背後でどのような職種の人が働き、どのような体制や構造になっているのかを知る人はほとんどいません。ましてや、医師という職種の中でも中央診療部門に属する病理医や検査医を知っている人は少ないでしょうし、臨床検査技師という職業があることを知っている人はさらに少ないかも知れません。このような状況で、大学受験に際して、親や親戚の仕事をじっくり見て理解した人はともかく、多くの学生は個人の成績から教師によって推薦された進路を選ぶことが多いようです。そういうこともあってか、臨床検査技師の仕事とはどのようなものなのか、大学を卒業すると検査技師としてどのようなキャリアパスがあるのかも知らずに、大学の臨床検査科へ来ている人も多いというのです。

冒頭で述べた教え子達から、講義に来ませんかというお誘いを頂きましたので、昨年度から二つの大学で、「臨床検査の過去、現在、そして未来」と題して、医療、医学、臨床検査とは何かを歴史を通して学ぶ話ができるようにさせて頂きました。そして、その講義を大手衛生検査所の人と一緒に担当することとし、私が歴史と現在の医療体制、病理検査室の状況を、その方には検体検査、検査技師として就く職場の現状、病院や衛生検査所以外にどのような職種に進めるのか、経験者としてのアドバイスなどを入れ込んで話してもらいました。医療体制の中では、組織や社会の構成、経営学者のP.F. ドラッカーの「3人の石工の譬え」を使っただけの職業人としての在り方や考え方も話しました。講義終了後に頂いた学生からのコメントや感想では、「知らなかった医療や医学がどんなものであるかが良く分かった」、「臨床検査、技師の存在の重要性を改めて感じた」、「検査の種類が多いこと、検査技師には多くの仕事があること、非常に重要な仕事であることを知り、この道に進んで良かったと思った」、「検査についての興味や関心がより高まった」、「これから責任と誇りをもって学習していきたい」、「近未来の医療や検査を創造していくのは自分達だと気付いて良かった」、「4年後の進路について具体的に分かったし、詳しい説明がなされ良かった」、などの声がありました。やはり、学習初期の段階で、その領域の歴史、現状、これからの進路にはどんなものがあるか等を示してあげることが大切だと感じた次第です。多くの学生には、今後もこの進路に留まり、卒業後は医療の道へと進んで、それぞれの立場で医療、検査医学に貢献し、患者のために働いて欲しいと願っています。